

な っ ぐ さ ふ ゆ な み
夏 草 冬 濤

井 上 靖

新 潮 文 庫

夏 草 冬 濤



定価は帯またはカバー
に表示してあります。

新潮文庫 草 63 R

昭和四十五年四月二十五日 印刷
昭和四十五年四月三十日 発行

著 者 井 上 靖

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵便 番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一
振替 東京 八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新潮文庫

夏 草 冬 濤

井 上 靖 著



新 潮 社 版

1928

夏^{なつ}

草^{くさ}

冬^{ふゆ}

濤^{なみ}

一章

夏 草 冬 溝

七月二十日から夏期休暇にはいったが、その日から十日間、静浦^{しずうら}で泳ぎのできない低学年の生徒のために、水泳の講習会が開かれた。三年生の洪作^{こうさく}はそれにはいった。洪作は小学生時代を郷里の伊豆の山村で送っていて、夏は毎日のように川にはいつていたので、川なら、どんな急流でもそれに体を投げ込むことができたが、海となると、からきし意気地^{いぐじ}がなかった。

溪流の石と石との間を、流れの力を借りて、下流へと体を流して行くことを、村の子供たちはナンガレと呼んでいたが、その名の如く泳ぐのではなくて流れるのである。洪作もナンガレはできたが、海においてのまともな泳ぎはできなかった。

洪作は一年生の間を浜松中学で送り、二年の初めに沼津中学へ転校して来たので、沼津中学における夏休みは、こんどが二度めであった。浜松中学の一年の夏は学校から浜名湖の水泳場に通わされたが二三日通っただけで、腹痛を起し、それをしおに水泳の講習を受けるのをやめてしまい、去年の夏は沼津中学へ転校したばかりで友達もできていなかった。水泳を習う気持にはなれなかった。従って、本格的な水泳の講習を受けるのは、こんどが初めてであると言った。よかった。

洪作が浜松中学から沼津中学へ転校したのは、軍医だった父が、浜松の連隊から台北^{たいはい}の師団へ転任することになり、母や弟妹は父と一緒に台北へ行ったが、洪作だけは同じ静岡県でも郷里に

近い沼津の中学へと転校し、三島の伯母おばの家からそこへ通うことになったのであった。洪作も家族の者と一緒に台北へ行き、その中学へ転じてもいいわけだったが、父には台北へ赴任してもまた幾許いくばくもなくして他へ転じかねないという懸念けんねんがあったらしく、そんなことから、洪作を沼津中学へ転じさせ、そこに落ちつかせる方針をとったのであった。

洪作は父の姉に当る伯母の家から沼津中学へ通った。三島と沼津の間には電車もあり、電車で通学する者もあれば、自転車を通う者もあった。極く少数の者だけが三島沼津間の一里の道を徒歩で通った。洪作はその徒歩組の一人であった。当時自転車は高価なものとされており、商売でも営んでいる家は別にして、普通の家ではなかなか通学の目的だけで子供に自転車を買ってやることはなかった。

洪作は同級生の二人が徒歩で通っていたので、その二人につき合うようなつもりで、毎朝のよううに誘い合せて、松並木がところどころに残っている街道を歩いた。ある時は駆け、ある時は道端に腰を降ろしたりして、毎朝のように遊び遊び歩いた。歩いて行くと、途中の部落から生徒が加わって来たりして、徒歩組には徒歩組の楽しさがあった。

静浦の水泳の講習会へ通う時も、洪作は毎朝沼津まで歩き、沼津の街まちの中心部からバスで静浦へ向った。静浦の海岸は御用邸があるくらいで、波のおだやかな、危険のないいい海水浴場だった。

洪作は静浦でバスを降り、中学の水泳場のある浜の方へ歩いて行く時が、一番楽しかった。他校の生徒がいれないように、水泳場には区切りがしてあって、そこに白い旗が何本も海風にはためいていた。他校の水泳場も、少しの間隔をあけて幾つか設けられてあり、それぞれが旗を立

てて、自分たちの水泳場の区域を示していた。白い旗もあれば、赤い旗もあり、時には青い旗もあった。そしてそれぞれの区域の中に、少年や少女たちが、色紙いろがみのかけらでも振り撒いたような賑やかさでちらばっていた。叫び声や喚声は絶えず起っていたが、それらは波の音で消されていった。どの水泳場も一つか二つの飛込台を持っており、いつそこへ目をやっても、夥おびただしい数の河童かっぱたちがそこにたかっていた。

洪作はその水泳場へ行って、出席簿に名前を書き込むと、自分の配されている組を探してそこへはいって行った。

洪作はナンガレができるくらいだから、潮の中へ体を浮かすことはできた。泳ぎもすぐ覚えることができた。ただ深いところへ行くことはできなかった。体も浮くし、多少の泳ぎもできるの、指導に当たっている上級生の命令通り、飛込台の設けられてあるところまでは、普通の少年なら、なんでもなく行くことができる筈はずだったが、洪作はそれがだめだった。ここは大海の一部であり、底知れぬ深さを持った海につながっているのだと思うと、ふいに恐怖心が彼を襲った。

「もう、おまえは大丈夫だ。二十メートルや三十メートルはらくに泳げる筈だ」

上級生は言ったが、洪作は飛込台のところまで行くことなど思いもよらなかった。いつも尻しりごみした。そうした洪作に気付くと、上級生はそんな洪作が理解に苦しむらしく、

「なぜ行かないんだ」

と怖い顔こゝろをした。

「怖いもん」

洪作が言うと、

「怖い!? 情けないことを言うな。なぜ怖い」

「もしものことがあったら」

「もしももくそもあるか、この野郎!」

洪作は頭から潮の中に突込まれたが、そんなことは何でもなかった。頭を水の中へ入れるぐらいのことはナンガレで毎日やっていた。

陸からそう遠く離れない限りに於ては、洪作は潮の中に体をつけていることは楽しかった。ただ急に脚でも引きつってしまった場合、すぐ引き返すことのできぬような遠い沖に浮かんでいるということとは不安だった。

こうした洪作のことは、すぐ上級生の間では問題になったらしく、ある日五年生の一人がやって来て、

「おめえか、深いところへ行けねえという奴は」

と、言った。陽やけした真黒い顔の中で眼だけ光っている。

洪作は飛込台のところまで泳ぐように命じられた。相手の形相が凄かったので、両手と両足をやたらにばたつかせて必死に飛込台の方へ近づこうとした。十回ほど手足をばたつかせているうちに、背の届かぬ深いところへ来たと思うと、いきなり大きな不安が洪作をわし掴みにした。もうだめだと思った。そしてすぐ方向転換して、あとはめちやくちやに手足をばたつかせた。

「この野郎!」

そんな声と一緒に、洪作は自分の頭が上級生の手で潮の中に突込まれるのを感じた。漸くに海面に頭を出すと、また突込まれた。そんなことを二三回して、海水を飲まされた。三四人の

五年生がやって来た。洪作はボートに乗せられて、飛込台のところへ連れて行かれ、その近くで潮の中へ投げ込まれた。洪作はすぐ飛込台の足の一本にしがみついた。そして、潮の中に居る限りこの上どんなことをされるか判らないと思ったので、飛込台の上に這い上がった。

五年生の一人が飛込台の上へ上がって来た。ボートは他の五年生たちに依って、浜の方へ戻されて行った。飛込台へ上がって来たのは岡という生徒だった。

「ここから飛び込みな」岡は言った。

その口調は静かだったが、ひどく残酷なものを持っていた。

「ここから飛び込む？」

洪作は海面を見降ろした。陸から見ると、飛込台はそれ程の高さには見えなかったが、いざその上に上がってみると、潮の面までは相当の距離があった。飛込台のところまで泳いで来られないくらいであるから、ましてその上から飛び込むというようなことは思いもよらないことだった。

「さあ、飛び込め」

岡はねめつけるようにしていたが、

「飛び込まないと、突き落すぞ」

「本当に、俺は、泳げないんだ」

「何を言っているやあがる。三年にもなって泳げない奴があるか。泳げないなら、泳げるようにしてやらあ」

岡が一步体を近づけて来たので、洪作はあたりを見廻した。しがみつくものはどこにもなかった。

「俺、自分で飛び込む」

洪作は言った。突き落されるより、自分で飛び込む方がいいと思った。しかし、飛び込めるといふ自信はなかった。一分でも時を稼^{かせ}ぐつもりで、洪作は飛込台の上に体をまっすぐにして立った。自分が立ち到っている困難とは無関係に、浜は強い夏の陽に輝き、そこに無数の小さい裸体が散らばっていた。海から上がっている時間なので、海中には一人の河童^{かわづま}の姿もなく、みんな浜にむらがっていた。

「さあ、早く飛び込め！」

岡は催促した。飛び込めと言われても、そう簡単に飛び込めるわけのものではなかった。上から見降ろすと、飛込台の脚に波がぶつかっては砕けている。飛込台はすっかり青黒い波に取り巻かれている。浜の方から見ると、海は青く美しく見えるが、上から見ると限りには、海面はいやにでこぼこして、青黒く、不機嫌^{ふきげん}である。

「早く飛び込め！」

その声で浜の方を見ると、浜が急に遠くなって見えた。海水浴場も遠く小さくなっており、そこにちらばっている無数の河童たちの姿も豆粒のように小さくなっている。海水浴場から少し離れたところに、こぼれ落ちそうなほど民家を満載した切岸^{きりぎし}が続いているが、その切岸もまた遠く小さくなっている。

もうだめだと洪作は思った。ここからあんな遠い岸まで泳いで行ける筈のものではない。途中で溺^{おぼ}れてしまふにきまっている。大体こんな高いところから飛び込んだら、際限なく海の底へ落ちて行くだろう。何か適当な操作をしなければ海面には浮かび上がって来ないだろう。ところが

自分はそんな操作は何も知らないのだ。操作を知らない以上、どこまでも沈んで行くだろう。再び海面へ浮かび上がって来ることなど望めないのだ。洪作は飛込台の上に坐った。

「俺、だめ」

洪作は言った。

「なんだと!？」

岡の顔は醜くゆがんだ。

「立て！」

「俺、だめ」

「女の腐ったような奴だな。怖いのか」

「死ぬのは厭だ」

「大袈裟なこと言やあがる。死ぬか、死なないか験ためしてやらあ」

岡の腕が伸びて来た。

「うわあっ！」

「何を言ってやあがる！」

「うわあっ！」

どこにもつかまるところはなかった。坐ったまま飛込台の端まで引きずられて行った。絶体絶命だった。死ぬんなら自分で死のうと洪作は思った。

「自分で飛び込む」

洪作は岡の手を払って立ち上がった。そしてもう一度下をのぞいた。海面まではさっきよりま

た遠くなっている。洪作は再び坐り込んだ。岡が襲いかかって来た。もみ合っているうちに洪作は中腰になった。その洪作の背を岡の手が突いた。洪作の体は飛込台から離れた。

洪作は自分の体が、雑巾でも落ちて行くように、ひどくみじめな固まりとなって落下して行くのを感じた。何か大きな叫び声を口から出したと思うが、あとは夢中だった。小さい三角波がぶさぶさとぶつかり合っている紺青の海面が、あっという間に近づいたと思うと、洪作はその中に自分の体が突きささるのを感じた。

腹部に烈しい痛みを覚えた。それと一緒に潮の中へ沈んで行ったが、すぐまたそこから弾き返された。ひょっこりと首が海面に出た。何も見えなかった。首を出した周囲は波ばかりだった。

うわあっ！ 洪作は手をばたばたさせた。溺れると思った。が、すぐ本能的に足だけを動かす立ち泳ぎの姿勢をとった。体は浮いていた。首を海面に出したひどく頼りない格好だが、体が浮いていることだけは確かだった。飛込台から飛び込んだ筈なのに、その飛込台はどこにも見えなかった。すると、自分を海の中へ突き落した岡の顔が、半間とは離れていないすぐ近くの潮の中から浮かび上がって来た。

岡は口から海水を吐き出してから、

「岸まで泳いで行け。俺がついて行ってやる」

「俺、だめだ。——飛込台まで連れてって、溺れる」

洪作は必死だった。本当に溺れそうだった。

「ばか、やぐらはおめえのうしろにあらあ」

その言葉で、洪作は夢中で体の向きを変えた。なるほど飛込台は半間と隔たっていないところ

にあった。洪作は、いきなり、その脚の一本に掴まった。やれ、やれと思った。ここに掴まっている限りは、深い海底へ落ち込んで行く心配はなかった。

飛込台の裾にかじりついてから、恐怖感が改めて洪作を驚嘆みにした。

「おい、泳いで行こう」

岡は言った。冗談ではないと思った。洪作は岡につかまらないうちにとまって、潮の中から体を抜くと、すぐ飛込台の裾の横木に足をかけた。恐ろしい試練を経たためか、手足が抜けるようにだるかった。洪作はさっき岡に突き落された台の上に這い上がった。

洪作は岡がみごとな抜き手を切って浜の方へ泳いで行くのを見た。岡は見る見るうちに浜に近づいて行き、やがて岡の小さくなった体が浜の上にばら撒かれている河童の群れの中はいって行くのが見えた。

岡が居なくなつたことで、洪作はほっとした。もう突き落されることも、泳ぎを強制されることもなかった。ただ、これで総ての問題が片づいたわけではなかった。飛込台の上に一人だけ残されてしまっている。洪作はまた海水浴場の方へ眼を遣った。そこはさっきよりまた遠くなくなって見えた。この時、洪作はぼつんと額に冷たいものを感じた。

洪作は空を仰いだ。瞬間、また冷たいものを頬とひたいに感じた。空の半分は青く晴れ渡っていて、陽の光を海面に落しているが、頭の上の半分はすっかり黒い夕立雲に覆われている。

浜の方に眼をやると、水泳場には異変が起きていた。河童たちの尽くが立ち上がっている。ついさっきまで砂浜に寝そべったり、砂弄びなどしていた連中が、ひとり残らず立ち上がって動き出している。巢に水でもかけられた蟻の動きに似ている。無統制なあわただしい動きである。夕

立が来るので引き上げようというのであろうか。

雨が落ち始めた。頬にも、ひたいにも、肩にも、腕にも、雨滴^{うてき}の散弾が見舞い始めた。大粒の雨である。

——おおい！

洪作は叫んだ。ありったけの声を口から出したが、それが浜まで届くとは思われなかった。雨にたたかれて、海面は急に生き生きとした表情を持ち始め、雨の音か波の音が判^{わか}らないが、何か騒然としたものがあたりに立て込めようとしている。

——おおい！

洪作は何回も叫んだ。雨の落ちるのは烈しくなりつつあった。完全な夕立である。大粒の雨が海面にも、飛込台にも、洪作の体にも落ちていく。水泳場の一角から、河童たちは逃^{のが}れ出していた。水泳場を仕切っている旗も次々に片付けられて行く。

——おおい！

洪作は、しかし、まだ誰かが救^{たす}けに来てくれるに違いないと思っていた。自分がここに居るところとは岡が知っている。岡以外にも何人かの五年生が知っている筈である。

しかし、みるみるうちに水泳場から人間の姿はみえなくなって行った。最後に四五人の河童たちが、ひとかたまりになって駆け出して行くと、あとの浜はまるで違ったものになった。もはや水泳場でも何でもなかった。人気のない無気味な砂浜の端^{はし}の方に、ボートが五六艘^{そう}置かれていただけである。

——おおい！

洪作はやたらに叫んでいた。が、そのうちに雨煙りで、砂浜の方がかすんで来ると、洪作は叫ぶのをやめた。事態は、どうやら、とんでもない方に進んでいるらしい。自分がここに残されていることは、誰にも気付かれなかったのだ。あるいは気付いた者があったかも知れないが、他校の生徒か村の子供とでも思ったのであろう。

洪作は、岡の残酷な顔を思い浮かべた。困らせてやろうと思ったのかも知れない。そうでなかったら、岡もまた自分をここに残して来たのを忘れたのだ。頭の悪そうな奴だから、忘れるということもあるかも知れない。

洪作は雨に叩かれたまま、両膝を両手でかかえて、飛込台の上にうずくまっていた。雨は烈しく落ちていたが、依然として遠くの空は明るく青かったのだ。雨がそう長く降っていようとは思われなかった。ただ体が冷たくなって、ひどく寒かった。

雨は短い時間烈しく降りしきると、急速に小降りになって、それと一緒に陽の光まで射し始めた。陽の光の中で雨脚が銀色に光っている。不安は薄紙をはぐように薄らいで行ったが、それにしては、飛込台の上にひとり残されている困難な状況は依然として変わっていなかった。

そのうちに水泳場の浜に三つの小さい人影が現われた。洪作はそれに眼を当てていた。三人とも裸である。彼等は浜を横切ってボートの置いてあるところへ行くと、その一艘を押し出し、次にそれに飛び乗った。

洪作はほっとした。たれかが自分を連れに来てくれるのであろうと思った。海面は夕立のために、見違えるほど生き生きとして、波立っていた。ボートは体を大きく波に揺られながら、見る見るうちに近づいて来た。二人が漕いでおり、一人が突立っている。